

ひょうたん島通信

大槌発! 第47回

岩手県大槌町の大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターのすぐ目の前に、蓬萊島ほうらいじまという小さな島があります。井上ひさしの人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルともされるこの島は、「ひょうたん島」の愛称で大槌町の人々に親しまれてきました。ひょうたん島から大槌町の復興、そして地域とともに復旧に向けて歩む沿岸センターの様子をお届けします。



町の鳥がワルモノに?

佐藤信彦 大気海洋研究所 海洋生物資源部門 資源生態分野
特任研究員

各市町村では、その地域を象徴する動植物が「町のシンボル」として掲げられています。国際沿岸海洋研究センターが位置する岩手県大槌町では、「町の花／ツツジ」、「町の魚／サケ」、そして「町の鳥／カモメ」が掲げられています。初夏になると、新山高原にはツツジが咲き誇り、色鮮やかな景色を楽しませてくれます。秋から冬にかけて来遊してくるサケは、重要な漁業資源として地域住民に恩恵をもたらしています。さて、「町の鳥／カモメ」はどうでしょうか？ 実は、町の鳥として慕われるべき存在のカモメがある理由から悪者扱いされているようです。

春先、普段は漁港にたむろしているカモメ達がなぜか大槌川に集まってきました。どうもサケの稚魚を食べに集まっているようです。三陸沿岸域では、サケ漁業を安定させるためにサケ稚魚の放流が盛んに行われています。河川で放流された稚魚は、海に降りてオホーツクやベーリング海で成長します。そして、放流から3～5年経つと産卵のために三陸沿岸に戻

ってきます。この戻ってきたサケを漁獲しているのですが、ここ数年は不漁が続き、カモメが稚魚を食べることによる初期減耗が原因ではないかと指摘されています。地元では、カモメが「サケを減らす悪者」として認識され、駆除を求める声も上がっています。

我々は、カモメ達が本当にサケ稚魚を食べているのか、そしてその食べる量はどれ程なのかを調査しました。調査の結果、カモメ科のカモメとウミネコがサケ稚魚を食べていることが分かりました。多い時は、150羽近いカモメとウミネコが大挙しており、その光景は圧巻のものです。確かに、この光景を目の当たりにするとカモメ達を悪者扱いしたくなる気持ちが理解できます。ところが、じっくり観察してみるとカモメ達の餌取りはあまり上手くはなく、1匹のカモメが1時間あたりに食べるサケ稚魚の数は、平均2～3匹ほどでした。数理モデルを駆使し、放流期間にカモメ達が食べるサケ稚魚の総数を推定すると、大槌川での放流匹数に対してわずか0.25%程度という結果



大槌町のご当地マンホール。「町の花／ツツジ」と共に「町の鳥／カモメ」がデザインされています（岩手県下水道公社のクリアファイルを撮影）。

になりました。カモメによるサケ稚魚の食害は、サケ不漁の大きな原因にはなっていないようです。

この調査から、「サケを減らす悪者」というカモメ達の汚名を返上することができました。しかし、調査のためにGPSを背負わせたり、採血したりする私はカモメ達から悪者扱いされ続けるのでしよう。

調査船 弥生のつばやき

小学生からの手紙



国際沿岸海洋研究センターの調査船「弥生」と申します。皆様のご支援による竣工から早5年が経ちました。私の業務は沿岸海域の調査・観測ですが、センター界隈の最新トピックをお伝えするこのコーナーも担当しています。

先日、一通の手紙を目にしました。差出人は大槌町の小学4年生。そういえば、新センター完成式典のあった7月20日の午前中。来賓の受け入れ準備にてんてこ舞いの事務職員を尻目に、センターのエンタランスにゴロリと寝転ぶ小学生の姿がありました。大槌学園の「ふれあい体験」という授業です。視線の先はご想像の通り天井画「生命のアーキペラゴ」(no.1513表紙参照)。お馴染みの生き物ばかりでなく、奇妙な形のウィルスや栄養塩類の構造式、生物の遺伝情報である

DNA塩基配列など、様々な“海”が描かれています。気になるものを見つけた子供が手を上げると、作者の大小島真木さんが、それを描いた“思い”や“技術”について語ります。一方、センターの教員は、その生物や事象についての科学的な解説です。子供たちと芸術家と科学者のやり取りは、どこまでも広く、深く、無限に続いてゆくようでした。午後に行われた新棟見学会のため、岩手県知事や大槌町長、本学役員の方々がエンタランスをお通りになった時、つい先ほどまで

ここに子供たちが寝転んでいたと思うと、なんだか嬉しくなっていました。「海洋生物研究所」ではないんですけどね(写真)。



制作：大気海洋研究所広報室（内線：66430）